

諸説記聞」「東遊備忘録」八冊、いづれも雜記。

明治二七 一八九四 七九

郷家百花山荘に悠々の生活を悦び詩歌画筆に遊ぶこと数年、流行性感冒により、三月一〇日長逝。立中山先塋に葬られる。諡は得生院青蓮居士。

明治二八 一八九五 門人らは令嗣繁次郎氏と謀り碑を建て、

閏歴を記す。墓額は伊藤圭介、撰文は、当時大分県師範学校前教諭宇都宮健哉。

(付記)

本稿は、女子聖学院短大の山下愛子氏が、同大学紀要第九号(昭五二、二)に発表された「賀來飛霞―資料編」から抄出したものである。なお、注記は、都合により省略させていただいた。

編集後期

昭和五十三年度会誌編のしんがりを受けもった。会員はもちろん、芸術会館若手学芸員諸氏の意欲的な論説をはじめ、多数の玉稿を寄せていただいたことを感謝している。

巻頭には、中山重記氏の「造神宮寺料の行方について」を掲載した。宇佐神宮領に関するこれまでの諸説に問題提起をされている。今後とも、氏の御活躍を祈りたい。

宗像健一氏は、南宗画の日本化とは何かを追求した。竹田・草坪が「日本化への階程をどのようにたどるのか、個々の作品からの実証を期待する。

後藤龍二氏の論文は、荒井龍男というわが国美術史上未知の作家をとりあげた力作である。荒井の中津における生育歴やその風土が彼の創作にどのような影響を与えたか、今後の調査にまたねばなるまい。

山内美德氏の論文は、従来、不明であった二豊刀工の存在に触れている。今後、関係古文書をはじめ、現地調査結果、作風の分析などを駆使した密な取組みがまたれる。

安部弥右衛門氏は、六回にわたって「羽出浦の歴史と民俗」

を生き生きと叙述された。その記録は、氏の生の証明でもある。かくしやくたる氏の御活躍に敬意を表する。

豊田寛三氏は、近世庶民の動静を示す「豊前国時枝領百姓騒動史料」を紹介された。今後、つづけて発表される由である。近世史研究のために、研究家・会員諸氏とともに喜びたい。

後藤重己・山中浩司氏の紹介資料は、宇佐市橋津文書「御変革一件」である。江戸時代から明治時代への変革期の地方の姿を伝える史料で、豊田氏のものとともに学術的に高い価値を示すものと信ずる。

山下愛子氏の賀来飛霞に関する研究を紙面の都合で再録できないのが残念である。ここでは、年譜を抄録することにとどめた。

校正は、県史編纂室の方々のお手をわずらせた。お礼を申し上げたい。

また、春がめぐってきた。本誌投稿者のように、一年に一度だけ、いいしごとをしたいと心にきめているが、果たしてどうなることや。会員諸氏の御健闘を祈るや切。

(芦刈記)

昭和五四年三月二五日印刷
昭和五四年三月三一日発行

大分県地方史 第九三号

編集人 芦刈 政治
発行人 渡辺 澄夫
印刷人 高井 久雄
印刷所 大分市上野町七番二十五号
三恵印刷株式会社
電話 〇〇一三三

大分市且ノ原七〇〇千八七〇一一
大分大学教育学部国史研究室内
発行所 大分県地方史研究会
(振替下関五二九四番)